

開拓の精神が 逆境からの脱出を可能にする

東京大学名誉教授
つきおよしお
月尾嘉男

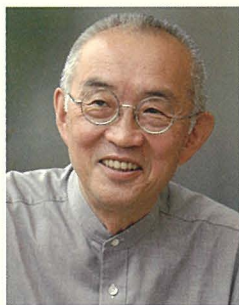
縮小時代の到来の現実

肥満人間の体重が減少する、放漫経営の経費が縮小する、倉庫の商品在庫が減少するなど、減少や縮小が歓迎される場合もあるが、一般には不安や憂鬱の原因である。その顕著な事例が最近話題になっている人口の減少である。今世紀末には日本全体の人口が半減するという予測も深刻であるが、日本創成会議が発表した、二五年後に若年女性の人口が半

分以下に減少する市区町村が全自治体の半分に到達するという報告は全国に衝撃をもたらした。

人口を流入超過にした離島

しかし、均等に減少するわけではないから、一部には逆境のなかで発展している地域も存在する。五島列島に小値賀町という漁村が存在する。佐世保港から高速の客船でも一時間二〇分かかる離島である。かつては漁業で繁栄し、戦後は約一万一



〇〇〇人が生活していたが、現在では四分の一近くに減少している。ところが最近、外部から移住してくる人数が増加し、ここ一〇年間の累積で一五三人にもなっている。人口の五%に相当する。

当然であるが、自然に実現した発展ではない。二五年前に隣接する無人の離島で野崎島自然学塾村を開催したことを皮切りに、漁業のブランド戦略、郷土料理教室、網元の住居を旅館やレストランに再生する事業などを次々に展開し、二〇〇七年には「おぢかアイランドツーリズム協会」を設立して観光事業を集約した。

その成果により、過去五年で観光客数も宿泊客数も約二五%増加し、これが雇用にも波及して移住人口の増加に直結した。

筆者も小値賀町を訪問したことがあるが、移住してきた人々の発想と地域の人々の意欲が融合し、地域全体に活気が充満している印象であった。さらに何人もの子供が短期滞在している民家を訪問したとき、小値賀町の政策の意義を実感した。高齢で引退した漁師の一家が世話をしているが、子供たちは家族の一員のよう

自助の精神で躍進する離島

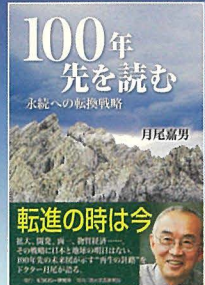
島根県海士町は境港から沖合六〇キロメートルにある隠岐群島の島前には約六〇〇〇人の島民が生活していたが、現在では約二三〇〇人にまで減少している。当然、転入より転出の人数が多数であり、一九九五年以後の一〇年間の累計は一四七名の転出超過であった。ところが二〇〇五年に転入が三〇名超過、一〇年に二〇名超過、一二年に一七名超過となり、人口減少に歯止めがかかった。

これも偶然ではなく、様々な努力の成果である。一九九八年に開始したのが「商品開発研修生」で、月給一五万円を支払って雇用した外部の人間が水産資源を新規の商品に仕立てる制度である。これは「海士乃塩」「島じゃ常識 さざえカレー」などのヒット商品を誕生させた。外部からの移住だけではなく、島内でも人口を増加させるため、第三子の誕生には五〇万円、第四子には一〇〇万円を支援する制度も創設された。

全国規模で話題になったのが、役場職員が自身の意欲を表明するため、給与の二割以上を自主返上したことである。これにより自治体間の給与水準を比較するラスパイレズ指数が全国最低になったが、素晴らしい反響も発生した。職員の意気に呼応して、町民から様々な補助を返上するという申出が続出したのである。全国どこでも補助金争奪戦が展開されている現代日本への痛烈な批判ともいえる快挙である。

外部の視点と開拓の精神

これらの事例以外にも、人口も経済も減少していく時代に発展している地域は数多く存在し、地域のみならず企業も参考にすべき教訓はいくつも発見できる。第一は外部の視点の活用である。見慣れた自然、馴染みの食材などは地域の人々には価値の実感がなくても、外部の人間には宝物になる。第二は自助の精神である。国家の政策に依存する助成をめざす安易な精神ではなく、自分で未来を開拓する精神が重要である。



絶賛発売中!!
ご注文は添付のハガキで